

◆七月、西日本での豪雨による水害のあと、九月四日から五日にかけて台風が直撃して関西で甚大な被害があった。と思う間もなく、こんどは六日未明、北海道で地震が起こり、それに伴って道内ほとんどの地域での停電。ブラックアウト（全系崩壊）だったらしい。山全体が崩れているようなところもあった。つくづく災害列島に住んでいるのだなあ、と思う。

◆池田桂一さんが復帰された。たいへんな手術だったようだが、原稿をもらえるまでに快復したことを喜びたい。今号の作品は、若いときにつくったという詩である。

◆丸山弘子さんのエッセイ集『三四二の花』と新野祐子さんの句集『奔流』が出た。どちらもスタジオ・マージンで発行したのだが、評判がいいらしい。新野さんのほうは思った以上に早くなくなりそうだとのこと、増刷りすることになった。『三四二の花』は、医師で歌人でもあった上田三四二の短歌に出てくる花をテーマに、先生との出会いや植物との関わりの文章が並ぶ。それに触発されたという神村さんのエッセイ、題は「茂吉の見た左沢」だ。初々しいころの斎藤茂吉に出会ったようで、興味深いものがある。

◆お寺の行事のときに祖母の三十三回忌供養をしてもらったので、思い出したことがある。祖母があれほど仙台の七夕まつりにこだわったのは、なぜだったのか。

昭和三年生まれの叔母・布宮みつこ（「展景」の元主宰者、故人）は、戦時中、谷地高等女学校（山形県）のときに学徒動員で神奈川県藤沢市の軍需工場へ行っている。当時は一学年違うだけであつたが、まったく違う体験をしたようだ。敗戦と同時にどうか不明だが、みつこは山形へ戻り、ともかく谷地の女学校を卒業して宮城県女子専門学校に進学した。その入学の折、祖母も一緒に仙台に行ったという。仙台の親戚は一軒だけ。仙台は坂の多い街である。おそらく親戚の家に荷物を送っていたのだろう。そこから寄宿舎か下宿に向けて、親子二人してリヤカーで布団などを運んでいた。すると米兵が話しかけてきたので、祖母は怖くてとっさに逃げようとする。が、みつこは米兵の「手伝いましょう」という英語がわかって、堂々と運んでもらったのだ。この話は何度も聞いた。これは戦後すぐのことだろうか。米兵とは進駐軍だったのかもしれない。推測であるが、祖母にとつてはこのときの印象が強かったのではないか。戦争が終わる直前、七月に空襲を受けた仙台の街がどのように復興したのか、七夕まつりがどんなに盛大なものか見に行きたかったのではないだろうか。毎年毎年、七夕の時期が巡ってくると、今年こそはとかな願いをもっていた。が、女の生活は家族のことに忙殺される。結局、祖母が仙台の七夕に行くことは叶わなかった。

十薬じゅうやくとはドクダミのこと。祖母はドクダミを摘んで乾燥させ、東京のみつこに送っていた。体が弱かったみつこは、大人になってからもドクダミを煎じたお茶を飲んでた。谷地のドクダミ茶を飲む人はいなくなったが、いままも屋敷内にはドクダミが繁茂している。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊 展景 91号

二〇一八年九月二十五日発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一―一七―二〇二

info@muninokai.com